

■ 日本薬剤学会 奨励賞を受賞

2018年5月30日(水)～6月1日(金)に静岡で開催された「日本薬剤学会第33年会」において、薬剤学分野の勝見 英正准教授が「2018年度日本薬剤学会奨励賞」を受賞しました。

本受賞は生体分子の高機能化に基づく製剤設計を活用した薬物送達システム（DDS）開発に関する一連の研究が評価されたものです。

受賞者：薬剤学分野 准教授 勝見 英正

演 題：生体分子の高機能化に基づく製剤設計を活用したDDS開発



さとし ひろゆき

■ 田中智之教授、安井裕之教授らの共著

「科学者の研究倫理 —化学・ライフサイエンスを中心に—」が出版されました。

薬理学分野 田中智之教授、代謝分析学分野 安井裕之教授らが、研究倫理をテーマとする著書を出しました。

本書は、一般的な研究倫理の解説に加え、化学・ライフサイエンスの分野に特徴的な種々の課題についても実例を交えて解説していますので、実験科学に取り組む学部生のみならず、指導する立場である研究者にも意義深い内容となっています。

また、各章末に研究倫理に関する議論の題材となる「問題」を掲載していることも本書の特徴であり、研究倫理に関する理解を深めるために活用できます。

※本書は図書館（1F 薬学倫理コーナー）にあります。ぜひご覧ください。



■ 統合薬科学系 高田和幸教授らの研究成果が書籍（講談社BLUE BACKSシリーズ）で紹介されました。

統合薬科学系 高田和幸教授らの研究成果が、R・ダグラス・フィールズ著『もうひとつの脳 ニューロンを支配する陰の主演「グリア細胞』』（講談社BLUE BACKS）で紹介されました。

ニューロン（神経細胞）とともに脳を構成しているもう一つの細胞（グリア細胞）。近年の研究からグリア細胞は、神経細胞を支えるだけでなく、脳の発達、免疫、神経シナプスの形成・剪定といった神経回路の可塑性など、個体の生涯に渡って脳機能そのものをダイナミックに制御する細胞であることが次々とわかり始めました。著者のR・ダグラス・フィールズ氏は、ニューロン-グリア相互作用、脳発達および記憶の細胞機構の世界的権威として知られる神経科学者であり、本書では、脳を理解する上で、このようなグリア細胞がいかに重要であるのか、わかりやすく解説されています。

今回紹介された研究成果は、アルツハイマー病の原因と考えられる「 β -アミロイド」を脳内から除去する方法として、ミクログリア移植の有効性について示唆したものです。本研究は、病態生理学分野において滋賀医科大学、札幌医科大学との共同研究として実施され、2007年の論文で発表されました。

※本書は図書館（1F 新着コーナー）にあります。ぜひご覧ください。

